

第1章 草創 1948年～1955年

ルーツは旧高師の「音楽」の授業（1948）

1945(昭和20)年8月15日、広島・長崎への原爆投下ののち、日本は連合国のポツダム宣言の受諾によって降服。太平洋戦争は終戦となった。1931(昭和6)年から14年続いた戦争の時代は終止符を打ち、平和はよみがえった。しかしその代償は大きく、200万人以上といわれる人命が失われ、国内のインフラはほとんど壊滅状態であった。



被災した演劇博物館

1945年5月25日の空襲により早稲田大学では、恩賜記念館、大隈会館が全焼するなど、学内の各所が罹災した

焼け野原となった東京へ多くの人々が帰ってきたが、厳しい耐乏生活を強いられることになる。学内の諸施設の3分の2以上を空襲で破壊された早稲田大学に、戦地からまた学徒動員の工場から、生き残った学生たちが戻ってきた。こうした中で学園は、早くも9月8日に授業を再開している。敗戦という歴史の転機に当たって、軍国主義から民主主義へ、占領軍(アメリカ)の指導により、日本の諸制度はコペルニクス的な大変革が行われていく。教育制度はその大きな柱の一つであった。

旧制度の早稲田大学には、大学院、政治経済学部・法学部・文学部・商学部・理工学部の5学部(3年)のほかに、その予科・旧制高等学校(2年)に相当する第一・第二高等学院、専門学校に相当する専門学校と専門部(3年)の政治経済科・法律科・商科・工科の4科、高等師範学校相当(4年)の高等師範部など、四つの高等教育機関を有していた。



梁田 貞
(1885～1959)

1939(昭和14)年に早稲田大学は、他の私大に先駆けて、政経・法・文・商・理工の5学部が女子の入学を認め、1945(昭和20)年までに、文学部を中心に56名の女子学生が学んでいたが、男子と同条件というわけではなく、特例としての措置であった。そんな中で、高等師範部は1946年4月、入試が同等に行われる初めての男女共学制をとった。混声合唱が混声である限り、女性(声)なくしては成り立たないので、早混成立の原点はここにある。そしてこの年の新学期から、高等師範部に従来の国語漢文科・英語科・体育科のほかに社会教育科が新設されることになる。この社会教育科に選択科目として、「音楽」の科目が設けられ、同年12月、作曲家梁田貞氏(p.329参照)が担当講師として迎えられた。

「音楽」の教室は、当時グランドピアノが置かれていた大隈講堂の地下控え室で、受講生は20人ほどであったという。他の教科の受講を妨げない配慮から、早朝8時からの開始であった。この講義には新入学の女子がかなり参加していて、授業の内容は歌唱指導や主に斉唱であったが合唱の時間があった。

“童謡先生”との出会い

——— 齋藤和哉 (2期)

昭和22年4月、入学と同時に音楽を選択した。梁田先生に初めてお会いしたのは、大隈講堂地下教室だった。明治から大正にかけての高名な作曲家だということは、後で知った。我々学生がお願いすると、先生は、気軽に美しいテノールで、歌ってくださいました。「オールド・ラングザイン」など、今も心に深く残っている。教え子は4万人とか。不肖私もその一人となれた。まことに光栄である。

梁田氏の指導法は、小学唱歌や人口に膾炙した世界民謡を、各パート別に自分が歌って覚えさせ、あと皆に歌わせ合わせるというやり方であった。あるとき遅れてやってきた学生に、梁田が「バスですか」と聞いたところ、「いいえ電車で来ました」と答えて大笑いになったというエピソードが残っている。戦後間もない混乱期に「音楽」を選択しようというのだから、音楽好きの学生であったのは間違いない。

「僕のように全く楽譜の読めない素人から、旧制中学、旧制高女時代に合唱団に入っていた者もいたが、ピアノが弾ける人はいなかったと思う。復学生、新入生ごちゃ混ぜだったが、音楽に対する渴望は皆強かった」と、当時の雰囲気小林智人(2期)は語る。この梁田貞氏による音楽指導が、わが早稲田大学混声合唱団の萌芽であった。

1948(昭和23)年には女子学生も増えてきた。この年入学した村島真理子(3期・現鶴飼)の話によると、前年から梁田氏の指導を受けた当時の2年生、小林のほか岩崎勝二(2期)、鶴飼廣(3期)、斎藤和哉(2期)、大塚房子(2期・現渡辺)などが中心になって、合唱団を作ろうという機運が高まり、早稲田大学高等師範部混声合唱団が結成されたという。発足時は男声約10名、女声は4名ほど。歌う曲は市販の『合唱世界名曲集』を使って週1回練習した。当時、学園にあった合唱団は、1907(明治40)年にルーツをもつ音楽協会合

Column

埋もれていた「高師混声」

早大混声の設立に直接かかわった先輩たちが卒業すると、特に記録を残さなかったためか、合唱団が生まれた経緯は時が経過するとともに忘れ去られていった。

1958(昭和33)年8月10日に長野県小県郡丸子町で開かれた演奏会のプログラムには、「合唱団の歴史」と題した項目があり、その中に「昭和23年創設(当時団員二十名程度)」とだけ書かれて、そのあとは「昭和27年 合唱コンクール2位入賞」と記述が飛んでいる。

翌1959年3月19日に名古屋市で開かれた演奏会のプログラムには、「昭和23年 教育学部学生会音楽研究部として創立。当時団員二十名程度」と、昭和24年の教育学部発足から使い始めた「音楽研究会」の名称が不正確な形で記され、しかもそれが昭和23年のことになっている。

1963年3月の演奏旅行のプログラムになると「早混のあゆみ 私達の早稲田大学混声合唱団の歴史は、昭和23年、学制改革により専門部高等師範(マ)が教育学部として発足することになったときに始まります。新学制の下で教育学部に音楽科が存在していなかったために、音楽を愛好する諸兄輩は、何とかしてその歴史を残そうと、教育学部音楽研究会として、音楽科の使用していたピアノを借り受け活動をはじめました」と、昭和24年の教育学部発足時のいきさつがそっくり前年の出来事として記載されている。

このように「早混の誕生は昭和23年に発足した教育学部音楽研究会……」という間違っただけでなく長く続くようになった理由は定かではないが、「うちの創立は昭和23年」という内容抜きの数字の言い伝えに「音楽科のピアノをもらって屋根裏部屋で活動を始めた」という別ルートの情報が結びついて、当時の先輩に確認することもなかったためではないだろうか。もう、戦後の学制改革の経緯を同時代の出来事として実感できる世代ではなかった。その結果梁田貞による音楽の授業、旧制高等師範部混声合唱団という昭和23年の出来事は、埋もれてしまったのである。

早混草創期のOB・OGといっても、昭和24年の「早稲田大学混声合唱団」の結成以降に参加した学部生だと、高等師範部と梁田貞のことを直接は知らない。人によっては早混の誕生を屋根裏部屋のピアノから語ってしまう場合があるのは致し方ないことであろう。また、2000年11月に当時の関係者にインタビューしたところ、社会教育科の選択科目である音楽の授業を「音楽科」と呼ぶ人がいた。もしかすると、この「音楽科」という言い方が一人歩きして、「かつて早稲田には、音楽学科が存在した」という伝説が生まれてしまった可能性もある。

新制大学の発足は昭和24年なのに、どうして23年に教育学部音楽研究会があったのかと疑問視する早混人も歴代いたが、真相は50年以上たってようやく明らかになった。



高等師範部45周年記念祭出演メンバー
1948年11月23日・大隈講堂

唱団(早稲田大学グリークラブ)だけであった。

この合唱団の記念すべき初舞台は、1948年の11月23日、高等師範部創立45周年記念祭であった。演奏曲目は定かでないが、「テキストの『合唱曲集』から有名民謡などを選んで歌った」らしい。このとき梁田貞氏は指揮はせず、急遽某オーケストラのバイオリニストに振ってもらったという。編成は男声9名、女声は10名であった(写真左)。実はこの年が高等師範部最後の年でもあった。というのは1948(昭和23)年でもって、明治以来の旧学制は終りを告げ、翌年からは学制改革によって生れた六・三・三・四制による新制大学の発足となるのである。

早稲田大学混声合唱団の誕生 (1949)



旧2号館(現1号館)

1949(昭和24)年4月、再発足した新制早稲田大学は、第一・第二政治経済学部、第一・第二法学部、第一・第二文学部、教育学部、第一・第二商学部、第一・第二理工学部の11学部と付属高等学院という編成となり、高等学院を除いてすべての学部は男女共学となった。高等師範部は教育学部に衣替えし、旧制の高等師範部の学生は新制の同学年(旧制の1年生は新制の1年生)に編入されて再スタートすることになる。また1年生には前年発足した新制高校1期生の男女も入学してきた。

ところで、新教育学部には音楽の科目はなかった。必然的に大学当局は講師である梁田氏の職を解くことになる。しかし新学制になっても歌うこと、ハモることの楽しさを知った仲間たちは、前年に発足した混声合唱団を存続させ活動を続けることを考えた。そこで考えられたのが、音楽科のない教育学部の研究団体として、「教育学部音楽研究会」を設立し、その実践組織としての「早稲田大学混声合唱団」が活動することである。メンバーは、学部事務所に申請し、承認された。この間学部当局との折衝で、種々支援をしたのは、旧高師時代の教務主任中西秀男教授と教育学部滝口宏・助教授であった。教育学部音楽研究会といっても、混声合唱以外の活動はなく、教育学部公認の団体として予算を得るための二枚看板であった。この体制は1962(昭和37)年まで続く。



中西秀男教授

創立時の早混の位置づけについて「学生会ニュース」(1951.9.25)は、教育学研究会など他の9団体と共に、次のように紹介している。

学生会には研究部があり、研究部の各会は、高等師範部時代から各学科に直結する課外活動であることを原則とする点で学部の特徴を出している。それらの会について略記しておきたい。

混声合唱団(教育学部音楽研究会)

戦後いち早く高等師範部の同好の者が集まって創立した団体である。学部としては音楽を持つことが必要でもあるが、機が熟さないで、教員学生の有志で開始した。混声は各大学を通じて数が少ないので、他学部の入会希望も多く、全学的規模に発展しつつある。

(『早稲田大学百年史』)

新発足にあたって、学園の職を退いた梁田貞氏に改めて指導をお願いしようと、有志が成城の自宅を訪問し懇請した。しかし梁田氏は、新制大学移行に際しての大学当局の対応を不誠実と感じていたようで、承諾を得ることはできなかった。

6月、専用の部室も当時の2号館(法学部・教育学部共同棟、現1号館)地下に確保した。前年まで専門部工科が物置として使っていた部屋であったという。第1回総会では、規約を定め役員を選任。岩崎勝二、斎藤和哉、村島真理子の3人が運営委員(マネージャー)となった。運営委員といっても、雑用をこなす全体の世話係といった感じであった。

新制度切り替えで留年の形となったためメンバーはかなり残っていたが、まずは新団員の募集を始めた。特に女声団員の獲得は必須である。古い団員名簿によると、入団月日最初の日付は6月21日で総勢11名。斎藤以下男声7名、女声は村島以下4名が名を連ねている。ほとんどは高師時代からのメンバーである2年・1年生が中心であったが、この年新制高校卒業生として入学した平野雄彦(3期)や旧制東京外事専門学校(現東京外語大)を卒業して3年に編入学した上田稔(1期)の名も見える。上田は以後、唯一の卒団1期生としてその名が記されることになった。翌22日に男1名、女3名の入団があった。名簿では初年度の団員数は20、パート別に見るとソプラノ2、アルト6、テナー5、バス7の布陣である。

新生合唱団の初練習は、記録によればやはりこの6月21日。場所は、かつて音楽の授業を受けた大隈講堂の地下控え室であった。もちろん指導者はいない。部員が集って音を合わせて適当に歌っているという状況であった。「女声は適宜ソプラノパートを歌っていた」という。ときには2年の伊藤隆や小川俊明(2期)がタクトを振ることもあったが、決まった指揮者はいなかった。

7月1日、親睦ハイキングとして観音崎灯台へ出掛けている。このころから“よく歌いよく遊ぶ”早混の伝統は生れていたわけだ。

梁田氏の担ぎ出しには失敗したが、やはり専門家の指導をということで、小林が知り合いのついでで、国立音楽学校出の清水嘉介氏に7月から来てもらうことになった。夏休み中もこの清水氏の指導で、10人ぐらいの少人数ながら週1回集って練習をした。曲目はウェーバー「舟歌」、メンデルスゾーン「緑の森よ」などであった。

この年にはまた、その後の合唱団活動の大きな基盤となった二つのエポックがあった。部室の移動とピアノの獲得である。

9月、新学期が始まると、部室は同じ2号館の5階に移った。5階には通常の教室はなく、いわゆる“屋根裏”であった。階段を上がったところに二つの部屋があり、その一つがあてがわれた。考古学専攻の滝口助教授が、「出土品の収納室が空くので使ったらどうか」と提案されたものである。部屋の奥へ行くと屋根の傾斜があって低くなり、しゃがんで歩かなければならないが、それまでの部室より広く、入り口を左に曲ると屋根を切り開いたベランダがあって、息抜きには絶好であった。

それまで使っていた控え室のピアノは高等師範部の什器で、新制移行と共に所属がはっきりしていなかったため、当時の柘植暉事務主任から音楽研究会に保管を打診される。新しい部室に移る機会に再度交渉して、「保管を委託される」という形(運搬費・調律費は団負担)で借り受けることになる。9月23日にこのピアノを地下から5階まで運び上げた。本体は専門業者が運んだが、取り外した脚やペダルなど付属品は部員が運び上げた。「五階に素敵な音楽室が出現した。これで毎日でもピアノのそばで歌うことが出来る」(p.26参照)と鶴飼が書いているように、この「屋根裏部屋」と早稲田に2台しかないピアノ(もう1台は大隈講堂)は、1962(昭和37)年に部室が移転するまで、合唱団初期の団員にとっては、練習がないときでも気軽に立ち寄る憩いの場であった。当時の団員は名簿上では20名ほどいたが、常時練習に出てくるのは10人あまり、相変わらず女声は少なかった。

この年グリークラブ(当時の名称は音楽協会合唱団)は、第2回全日本合唱コンクール学生の部で優勝したが、その後運営方針で意見の対立があって分裂し、脱退組によって新たに早稲田大学コール・フリーゲルが結成されている。



観音崎へ親睦ハイキング
1949年7月1日